



Title	韓国語話者による日本語倒置疑問文のイントネーション : 上昇の形式とその習得パターンをめぐって
Author(s)	土岐, 哲; 金, 秀芝
Citation	阪大日本語研究. 1997, 9, p. 17-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韓国語話者による日本語倒置疑問文の イントネーション

—上昇の形式とその習得パターンをめぐって—

Intonation of Japanese Inversion Questions by Korean
Speakers: Patterns in the Acquisition of the Rise

土岐 哲・金 秀芝

TOKI Satoshi & KIM Soo-Ji

キーワード：倒置疑問文，イントネーション，文末上昇形式，
習得パターン，韓国語話者

0 問題の所在

とくに文末上昇を伴った疑問文（WH／YN）のイントネーションを考えた場合、少なくとも日本語では「疑問を表す文末上昇は1文に1カ所」を原則とする。

もし、「コレ ナニ↑」（[-：イントネーションによる上昇を示す、以下同様）の倒置文「ナニ↑ コレ」を「ナニ↑ コレ↑」と発音すれば、それは1つの文というよりは、2つの文と解釈され、意味内容・表現意図も変わってくる。（ただし、現代の若年層に時折観察される「ナニ↑(1)コレー↑(2)」の(2)は(1)ほど大きくは上昇しないことなどから別物「句音調のひとつ」と考えられる。また、ティーチャー・トークの際の句末ごとに現れる「注目要求等」の上昇もピッチの上昇幅は「疑問」の上昇ほど大きくはない。）

ところが、韓国語話者（少なくともソウル及びその他の当該方言話者）がこの種の日本語文を発音すると、2カ所に明らかな上昇の観察されることがある。なぜ、韓国語話者にこのような現象が見られるのかについては、田窪（1990）の、日韓両言語における「ハ」と「ガ」の用法上の微妙な違

いに関する指摘が一部参考になる”。

ここでは上記の観点から、上級の日本語話者を対象にして、習得状況などいくつかの側面から調査・検討した結果について述べる。

1 先行研究との関連

外国語話者による日本語疑問文イントネーションの研究としては、鮎澤(1991)以降、一連の組織的研究がある。これによって、各国語のイントネーションパタンの特色や、それを背景とする日本語学習者が発した日本語の文末上昇の現れ方、習得の段階性等が明らかにされつつあるが、これらの研究は、基本的文型の上昇パターンを中心としている。これらによって、音声教育上、文末上昇がアクセント型との関連でどのような問題を含んでいるかなどが明らかにされたが、本研究の狙いは、日韓の、もう一段階複雑さの加わった文型を用いて、1文中の、上昇をさせる部分とさせない部分の対比を試み、いわゆる「上昇」そのものの動向とそれが現れる環境の異同に焦点を当ててみた。

2 実験の内容

実験は2段階に分けられる。第1段階は主としてソウル方言話者3名(20-30歳代)について、第2段階ではソウル以外の方言話者(木浦、済州島各1名、20-30歳代)で、ソウル在住歴の長い、いわば全国共通語的韓国語の話者について調査を行った。倒置疑問文の2カ所で上昇する現象が、当初、本研究に取り掛かる前に観察されたソウル方言話者に限られるのか、それとももっと広範な韓国語話者による一般的現象として観察されるものかを見るためである。

さらに、同様の調査を日本語話者についても行い、方言間の対比も試みた。東京方言話者(50歳代<女性:Jtf>)と佐世保、福岡方言話者(20歳代<男性:Jsm,,Jfm>)についてであるが、双方が標準的日本語を発した場合について調査し、日本語による倒置疑問文の上昇調の一般性を確認した。データ収集に当たっては、当方で日韓両言語の音声上の特色を考えながら用意し

た例文を、原則として5回ずつ、できるだけ自然に発話してもらった。

音声データは、タイピン型マイクを用いてDAT録音し、まずは聴覚印象によって整理・分類し、問題となったデータについては、各人の5発話中ピッチの変動状況がもっとも平均値に近いものを『音声録聞見ソフト』により分析・検討する。その際、F0ピッチ曲線は、男女の間に基本的高さの違いがあつて、そのままでは対比できないため、上昇の違いは「比率」によって表すことにした。

3 実験の結果

実験結果の観察からは、次のようなことが考えられる。

3-1

日本語：倒置疑問文になつても、倒置前の文末上昇がそのまま前半部の位置に移動し、倒置後の文末に上昇イントネーションが実現されることはない。後半部は自然下降に任せるのみである。なお、この現象は、東京語圏以外に、無核アクセント方言話者であっても、標準的日本語として発話した場合には、容易に実現される。

韓国語：倒置疑問文では、倒置後の文末にも上昇が実現され、1文中で2カ所上昇することも可能である。この現象は、ソウル以外の方言話者の場合にも観察されるが、これらの人々が日本語を話した場合にも転移され得る。

典型的な例として、同一の意味内容を現す文を対照させて挙げれば、次のようになる。

○日本語：（東京方言話者女性<Jtf>による）

Jtf1「出掛けたの↑ ユンジニ=B」（♀1国の人名、Yes/No疑問文）

前半部：上昇起点[191Hz]、上昇終点[293Hz]

後半部：（自然）下降起点[175Hz]、（自然）下降終点[124Hz]

{上昇比率：前1.53/後0.71（この上昇比率が1.0以上であれば上昇、

それ以下であれば下降を示す。以下同様) }

Jtf1 前半部にはアクセント核があつて、[～た' の↑] <[']アクセント核>のように、アクセントによる下降の直後にイントネーションの上昇が実現されている。

Jtf2 「いつ時間あく↑ 彼女は。」 (WH疑問文)

前半部：上昇起点[144Hz]、上昇終点[332Hz]

後半部：(自然)下降起点[237Hz]、(自然)下降終点[68Hz]

{上昇比率：前2.31/後0.29}

一方、Jtf2 の「時間あく(無核)」のように平板式からそのまま上昇が起る場合の方が上昇率は高い。逆に、Jtf1 の後半部は[カ'ノジョワ]のようにアクセント核があつて、そこに下降が伴う場合、下降の幅が大きい。
<以上図1 参照>

同様の文を、ソウル方言同様無核アクセントで知られる佐世保方言や福井方言の話者(Jsm、Jfm)が読んだ場合、アクセント形式の実現に多少の違いは見られるものの、前半上昇－後半下降という全般的イントネーション形式そのものに大きな違いは見られない。

Jsm2 「いつ時間あく↑ 彼女は。」：{上昇比率：前1.56/後0.53}

Jfm2 「いつ時間あく↑ 彼女は。」：{上昇比率：前1.87/後0.40}

○韓国語：(木浦方言を母語とする全国共通語的韓国語話者による)

Kmm1 「ttonasso・yunjini=v (Jtf1 と同一の意味内容)

前半部：上昇起点[88Hz]、上昇終点[178Hz]

後半部：上昇起点[81Hz]、上昇終点[163Hz]

{上昇比率：前2.02/後2.01}

Kmm2 「onje shiganna・keenun=v (Jtf2 と同一内容)

前半部：上昇起点[77Hz]、上昇終点[149Hz]

後半部：上昇起点[69Hz]、上昇終点[144Hz]

{上昇比率：前1.94/後2.09} <以上図2 参照>

(Kmm1、Kmm2ともに上昇に仕方は J 以上であり、この点は次の例の後半部で示すソウル方言話者の上昇例 J(ksf1-2)にも同様の傾向が見られる。)

○上の韓国語話者による日本語 (同一内容)

J(kmm)1「出掛けたの・ ユンジニ=v

前半部：上昇起点[81Hz]、上昇終点[140Hz]

後半部：上昇起点[78Hz]、上昇終点[145Hz]

{上昇比率：前1.73/後1.86}

J(kmm)2「いつ時間あく・ 彼女は=v

前半部：上昇起点[97Hz]、上昇終点[153Hz]

後半部：上昇起点[86Hz]、上昇終点[145Hz]

{上昇比率：前1.58/後1.69} <以上図3参照>

3-2

他に、1カ所しか上昇はしないものの、倒置後の後半部だけが上昇し、日本語話者による発話には見られない例もあり、このことから次のように考えられる。

日本語：本来の疑問文形式の文末には、倒置の有無にかかわらず上昇を伴わない場合もあるが、その場合、上昇はゼロである。

韓国語：上昇ゼロの他に、倒置後の後半部だけが上昇する場合もある。

次のソウル方言話者による日本語の例がそれである。

Ksfo1「ttonasso yunjini↑」(出掛けたの ユンジニ↑)

前半部：下降起点[300Hz]、下降終点[178Hz]

後半部：上昇起点[178Hz]、上昇終点[367Hz]

{上昇比率：前0.59/後2.06}

Ksfo2「onje shiganna khenun↑」(いつ時間あく 彼女は↑)

前半部：下降起点[367Hz]、下降終点[175Hz]

後半部：上昇起点[175Hz]、上昇終点[367Hz]

{上昇比率：前0.48/後2.10} <以上図4参照>

なお、これらの例文の「上昇」の仕方を聴覚印象で観察すると、日本語が曲線のカーブを描いて上昇するように聞こえるのに対して、韓国語は高く平に聞こえる。しかしながら、音響的に得られたピッチ曲線から、そのような傾向は抽出できそうにない。

では、ここで本来の日本語には現れにくい2カ所上昇、1カ所上昇の全体的傾向についてまとめてみよう。

これまで見てきたように、「疑問文の上昇」はどんな場合でも同一文中に2カ所可能なわけではない。例えば、日本語にも韓国語にも終助詞

「ka / kka」があつて、いずれの場合も、上昇を伴う場合と伴わない場合がある。その、上昇が伴わないケースが実現された場合は2カ所上昇は実現されない。しかし、その場合、日本語では上昇がゼロとなるが、韓国語ではゼロの他に、末尾で上昇される可能性があり、これが、韓国語話者による日本語にも転移されるものと考えられる。

日本語：a「――か↑――。」 b「――か――。」^{*2}

韓国語：a「――か↑――。」 b「――か――。」

(a, b : 正の転移へ)

c「――か＝|――↑。」 d「――か――↑。」

(c, d : 負の転移へ)

次の例を見てみよう。

○東京方言話者による例：

Jtf3「合格しましたか・あの人。」

前半部：上昇起点[161Hz]、上昇終点[286Hz]

後半部：(自然)下降起点[169Hz]、下降終点[130Hz]

{上昇比率：前1.78/後0.77} <図5参照>

○韓国語：

Kmm3-1「hap kyokhessumnikka↑ kusaram↑」

前半部：上昇起点[94Hz]、上昇終点[169Hz]

後半部：上昇起点[95Hz]、上昇終点[194Hz]

{上昇比率：前1.80/後2.04}

Ksfk3-2 「hap kyokhessumnikka ↑ kusaram」

前半部：上昇起点[217Hz]、上昇終点[332Hz]

後半部：(自然)下降起点[332Hz]、(自然)下降終点[206Hz]

{上昇比率：前1.53/後0.62} <以上図6参照>

○韓国語話者による日本語：

J(kmm)3-1 「合格しましたか・あの人=v

前半部：上昇起点[93Hz]、上昇終点[137Hz]

後半部：上昇起点[86Hz]、上昇終点[161Hz]

{上昇比率：前1.47/後1.87}

次は、基本的に日本語話者と似た傾向を示す例であるが、Jtfと比べると全体的にピッチの変動幅は小さく、平坦である。

J(ksfk)3-2 「合格しましたか ↑ あの人。」

前半部：上昇起点[204Hz]、上昇終点[293Hz]

後半部：下降起点[293Hz]、下降終点[169Hz]

{上昇比率：前1.44/後0.58} <以上図7参照>

ここで考えられるのは、学習者の習得状況によっては疑問の「か」に対して自動的に上昇を用いる場合もあるから、「か」のない文においても確認しておく必要があるが、その場合でも、ほぼ同様の傾向が見られる。

○東京方言話者：

Jtf4 「合格した ↑ あの人。」 {上昇比率：前1.39/後0.65}

○韓国語話者による日本語：

J(kmm)4「合格した↑ あの人↑」{上昇比率：前1.66/後2.07}

<以上図8参照>

4 例文「どう コーヒー」の検討

倒置される前の「コーヒー どう」は、場面によって2通りの言い方が可能である。一つは「コーヒー」を勧めたり、飲みに誘ったりする場合で、フォーカスは「コーヒー」にあり、そこに際立てが実現される。

もう一つは、飲んでいる相手にコーヒーの味について尋ねたりするもので、フォーカスは「どう」にあり、そこが際だてられる。

ところが、これが倒置文となって「どう」が先行した場合、前に持ってきたこと自体が文のフォーカスを前半部に固定化したことになって、とくにコーヒーを示す動作や前後の特別な文脈でもない限り、勧めたり誘ったりする意味は成立しない。際立ては「どう」にしか実現されないことになる。

実例を見てみよう。

4-1

先ずは、日本語話者（東京、佐世保）の例である。

Jtf5-1「どう↑ コーヒー。」

前半部：上昇起点[243Hz]、上昇終点[275Hz]

後半部：下降起点[180Hz]、下降終点[104Hz]

{上昇比率：前1.13/後0.58}

ここでは、前半部末尾の上昇幅は「ど'う」のアクセント核によりる下降などの影響によって大きくはないが、後半部全体が低く抑えられた上に、「コーヒ'ー」のアクセント核によって一層急降下している。次の佐世保方言話者も、全般的傾向としては同様の傾向を見せているが、前半部の上昇幅は小さくない。

Jsm5-2「どう↑ コーヒー。」

前半部：上昇起点[124Hz]、上昇終点[220Hz]

後半部：下降起点[135Hz]、下降終点[97Hz]

{上昇比率：前1.77/後0.72}

4-2

韓国語話者はどうであろうか。習得段階の面も含めて観察してみよう。

J(Ksfk) 5-1 「どう ↑ コーヒー ↑」

前半部：上昇起点[184Hz]、上昇終点[231Hz]

後半部：上昇起点[180Hz]、上昇終点[220Hz]

{上昇比率：前1.26/後1.22}

J(Ksmc) 5-2 「どう ↑ コーヒー ↑」

前半部：上昇起点[110Hz]、上昇終点[231Hz]

後半部：上昇起点[90Hz]、上昇終点[145Hz]

{上昇比率：前2.10/後1.61}

J(Kmm) 5-3 「どう ↑ コーヒー ↑」

前半部：上昇起点[89Hz]、上昇終点[142Hz]

後半部：上昇起点[89Hz]、上昇終点[106Hz]

{上昇比率：前1.60/後1.19} <以上図9参照>

上の[5-1]から[5-2]は、いずれも2カ所で上昇している例であるが、まず、気付くことは2カ所のピッチ上昇が共にほぼ同じ変動域内に収まっているということである。

次に、上昇の傾斜を見ると、[5-1]が全体的にピッチ変動の幅が狭く、上昇の傾斜も緩やかである。これに対して[5-2][5-3]のピッチ変動は、幅が広く、上昇の傾斜はもっと急になっている。この例で見る限り、違いは男女差にあるかに思われるが、次の例を見ると、女性でも傾斜が急な例が観察され、性差による違いであるとは言い切れないことが分かる。

4-3

これは、日本語話者の傾向と似た例である。

J(Ksfo) 5-4 「どう↑ コーヒー。」

前半部：上昇起点[204Hz]、上昇終点[275Hz]

後半部：下降起点[212Hz]、下降終点[138Hz]

{上昇比率:前1.34/後0.65}

J(Kcfk) 5-5 「どう↑ コーヒー。」

前半部：上昇起点[220Hz]、上昇終点[293Hz]

後半部：下降起点[237Hz]、下降終点[194Hz]

{上昇比率:前1.33/後0.82}

J(Ksmk) 5-6 「どう コーヒー。」

前半部：上昇起点[171Hz]、上昇終点[122Hz]

後半部：下降起点[127Hz]、下降終点[100Hz]

{上昇比率:前0.71/後0.79} <以上図10参照>

これらの例を比べてみると、上昇と下降の組み合わせという点では日本語話者の例と同様の傾向を示していると言えるものの、[5-4]と[5-5/5-6]とで次の点が異なっている。

(1) [5-4]では、全体的ピッチ変動の幅が大きく、[5-5/5-6]では小さい。

(2) [5-4]では、上昇の変動域が「上段」、下降の変動域が「下段」のように別れているが、[5-5/5-6]では、上昇も下降も共に同じ変動域内に収まっている。これでは、「どう」に固定されているこの文のフォーカスを音声形式で示すことにはならない。従って、日本語話者にもっとも近い形式を取っているのは[5-4]であるといえるが、[5-4]の場合であっても、また、その他の場合であっても、日本語話者に共通して見られる[ど'う↑-]のアクセント核による下降形式は、残念ながら十分であるとは言えない。この、アクセント核の有無によって左右されるピッチの変動は、日本語運用能力がかなり進んだ段階であっても手付かずに近い状態で残される傾向にある。

5 習得タイプの考察

これまで検討してきたことを基に、「上昇を伴う日本語倒置疑問文の習得タイプ」について考察すれば、次のようにまとめることができる。

タイプ1：2カ所上昇の形式がそのまま負の転移として現れるが、前半部と後半部の上昇の仕方を比べた場合、上昇終点の高さが同等もしくは後半部優勢の段階(1)から次第に後半部劣勢の段階(2)へと移行するものと考えられる。

タイプ2：2カ所上昇ではなく1カ所上昇が実現されるが、その上昇が倒置疑問文の末尾に実現される場合は、いまだ母語の形式が負の転移として実現された場合の域を脱してはいないといえる。すなわちこの段階までは、母語の形式と学習目標言語の形式の異同に対する気付きがあったとしても実現の段階までは達しない。

タイプ3：ようやく前半上昇、後半下降が実現される。母語の形式の一部が正の転移として現れたものとも考えることもできるが、双方とも同一のピッチ変動域内で実現されるため、文のフォーカスを示す判断材料までは実現されていない。同様に上昇ゼロ形式も母語の一部に存在することから、これが正の転移として現れる場合もあるが、前半後半共に同一のピッチ変動域内で下降が実現されるため、文のフォーカスまでは実現されていない。

タイプ4：前半上昇のピッチ変動域が上段、後半下降のピッチ変動域が下段のようにほぼ分離され、倒置によってフォーカスが固定された状況が実現される。ここまで来れば、イントネーション形式自体については習得の域に達したと認められる。

タイプ5：全体の変動幅や上昇率・下降率がアクセントの有核・無核に応じて、実現されるが、無核アクセントを背景とする学習者にとっては外国語話者・日本語話者にかかわらず到達しにくい。

6 音声指導への応用について

前節からも推察されるように、イントネーションの指導に際しては：

- 1) 文全体の中での上昇部・非上昇部の位置関係
- 2) 上昇の傾斜度のような、上昇・非上昇の形式
- 3) 区間毎のピッチ変動の幅などに見られるピッチ変動域の異同
- 4) アクセント形式…

等についていかに気付かせ、実現させるかを考えなければならないが、何よりも、それによって文の情報構造がいかに大きな影響を受けるものであるかを理解させてかかる必要がある。その理解も十分にされないまま単なる形式模倣の練習を進めたとしても、学習者にとっても指導者にとっても無駄な努力に終わってしまうであろう。形式と意味内容の結び付きがいまいなままでは、結局は個々の現象についての具体的な気付きに結び付きにくいからである。このような意味で、従来のような、表層に現れた学習者の現象のみから出発して一つ一つ対処していくかのようなやり方では、実のところ、根本的な改善には結び付かないものとする。

さて、実際に指導する段階になったとして、前節で示した項目を一つ一つ個別に取り上げて指導したとしても効率的ではない。個々の項目は有機的に結び付いているのであるから、できるだけ総合的な練習方法を考える必要があるが、これまで実際に試みた例を示せば、次のようなことが挙げられる。

1) 内容的理解促進の段階：

単一文だけの練習ではなく、一定以上の脈絡を含む材料を扱う。これにより文脈の把握を確実にさせ、新情報・旧情報などの配置・位置関係について理解を促進する。

2) 形式的理解促進の段階：

1) の理解ができていれば、それが音声的にどのように現れるかを理解するのは難しいことではない。ただ、学習者によって慣れない聴覚情報だけでは十分に把握できない場合もあるから、視覚情報として示す必要がある。ここで言う視覚情報とは必ずしもコンピュータの画面などを意味

するものではない。教師にそれなりの知識があれば、黒板に文字の大きさ高さに変化を持たせて書き出す程度のことで、かなりの効果がある。また、一度に大勢の学習者を相手に行うこともできるから手軽で現実的な方法でもある。

3) 形式実現の障害・利用可能な諸点の発見の段階：

先にも述べたとおり、学習者が練習中に発する日本語音声の形式の中には、そのまま通用する部分とそうでない部分がある。それら個々の例について、具体的かつ明確に評価し、それ以降の努力目標を立体的に示す。これによって学習者は、その段階で自分のおかれている段階を十分に把握でき、不必要な取り越し苦労から解放される。

4) 具体的練習の結果、できたこと・できないことの評価と改善案の具体的提示：

学習者の立場からすれば、もっとも不安で知りたいことであるのに、案外詳しくは触れられないままで過ごされてしまいがちなことである。ただし、これを学習者の目の前で瞬時に行うためには、個々の点についての的確な判断・問題解決のための優先順位の決定、その学習者に合った具体的な解決策の提示など教師の側に十分な訓練があつて始めて実現可能なことである。

5) 独修可能な練習方法の提示：練習目標の設定・練習方法の選択は、できるだけ誰にでも理解可能なものであることが望ましい。子供にも通じようであればより理想的である。簡単に思い出すことができ、特段の道具だてを要せず、時と所を選ばず、身近な方法でできるほうがよい。例えば、後半部を上昇させたくないのに、つい上昇させてしまうような場合、その部分をささやき声で言うようにして上昇を回避するなど、教師がそばにいてもなんとかできそうな方法が必要である。しかしながら、どんな練習方法にも学習者との相性のようなものがあつて、すべての学習者に向いている方法というものはない。学習者の学習パターンを知り、ある学習法についてどれだけ慣れているかなどについても、よくよく考えておかなければならない。

6) 後日のチェック：

その時点でもっとも適切な方法を伝えることができたとして、その発音方法を自動化のレベルまで持って行くためには、本人自身の十分な練習が不可欠であり、教師の責任の及ぶところではないという見方も成り立つ。しかしながら、その後どのような進展をみたのか、既に解決された問題、残された問題について要所要所でチェックしてみることは、きわめて重要である。

おわりに

今後の課題としては、より多くの文型のタイプについて、地域、世代、性別等による違いがあるかどうかについて体系的に調べてみる必要がある。また、表層に現れた現象のみならず、学習者自身がそれらをどのように知覚し、どのように制御しようとしているものかについても、種々の方法を用いて調べてみたい。学習者自身がモデル音声や自らの音声をどのような形で受け止めているのかについての研究が発展しなければ、音声指導の根本問題についての真の解決はないであろうと考えている。

なお、この研究は、平成5－7年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)「日本語教育のための韻律特徴の対照言語学的研究」(研究代表者：鮎澤孝子)の分担研究として行われたものであるが、実験等に当たっては、大阪大学大学院文学研究科の日韓両国の大学院生や客員研究員諸氏の多大な協力を得た。ここに明記して心からなる謝意を表する。

¹¹ 田窪(1990)の指摘は次のようであるが、「ハ」と「ガ」の用法が違えば、文のフォーカスの表し方や聞き手への働きかけ等にも違いが出てくる可能性があり、それが上昇のさせ方に影響を及ぼすことも考えられるため注目した：「…韓国語では、ハにあたるun/nunと、ガにあたるi/kaを区別する。この2つは、ほぼ日本語と対応するが、微妙な区別が存在する。韓国語では、(15:神戸大学はどこにありますか。)のような疑問詞疑問文では普

通i/kaでマークする。したがって、(16)のような文になる。

(16) kobe-tayhakkyo-ka eti issupnika? (※神戸大学がどこにありますか)…」

*2 このようなイントネーションパターンは、図11 (図表末尾) のように実現されるが、発話の対象は家族や親しい間柄の人物などに限定される。なお、限定の度合いは話者が女性の場合、更に著しい。

<参考文献>

土岐 哲(1989)「中国人・韓国人・アメリカ人による日本語のイントネーションとプロミネンス」『講座日本語と日本語教育第3巻 日本語の音声・音韻(下)』明治書院 pp. 258-287

関 光準(1989)「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」同上 pp. 303-331

田窪行則(1990)「対話における知識管理について—対話モデルからみた日本語の特性—」『アジアの諸言語と一般言語学』編者代表・崎山理/佐藤昭裕、三省堂 pp. 837-845

鮎澤孝子(1993)「外国人学習者による日本語の質問文イントネーションの習得過程」重点領域研究「日本語音声」平成4年度D-1班研究成果報告書『日本語音声と日本語教育』pp. 161-186

李 明姫(1994)「韓国人学習者の日本語の疑問文に見られる母語の韻律の干渉—釜山地方の学習者の場合—」釜山女子大学校論文集第37輯(師範大学篇)別冊 pp. 205-224(1994)

次のページに桐谷・今川氏の『音声録聞見ソフト』によって音響的に得られた音調曲線等を示すが、図の中の曲線上の数字は周波数(Hz)、右上の記号が意味するところは以下のである。

例1 J t f : 日本語による発話、東京出身者の、女性

— s — : 佐世保

— f — : 福井

例2 K m m : 韓国語による発話、木浦出身者の、男性

— s — ソウル

例3 J (k s f k) : 日本語による発話、(韓国、ソウル出身者の、女性、k氏)

— (— c — k) : チェジュ島 k氏

o : o氏

< 図 表 一 覧 >







